論文要旨

高層建築に囲まれた東京の日本庭園

—俯瞰する視点からの考察は可能か—

岡澤由季(経済学部 3 年)

指導教員：伊藤行雄

本論文では､｢東京の日本庭園を俯瞰する視点から考察することは可能か｣という仮説を検証している。現代において日本庭園の全景が高層建築から眺められるようになった。これは江戸時代の大名屋敷内に造られた日本庭園が点在する周囲で都市の再開発が行われた結果、生じた現象である。現在の東京に日本庭園が残されたのは、江戸時代に「庭園都市江戸」とよばれるほど多くの日本庭園が造られたからである。明暦の大火後、幕府が大名に屋敷を多数造営させる制度があったことが、大名が屋敷内に日本庭園を造営する契機となった。さらに江戸の地形を活かした庭園造りが行われ、庭園は大名が将軍や臣下をもてなす社交の場としても活用され、多くの庭園が江戸の地に生まれることになった。

このような歴史をふまえたうえで､｢俯瞰する視点｣を考察した。江戸時代の大名庭園には既に俯瞰する視点からの観賞が行われていた。作庭家の重森三玲は俯瞰する視点を前提に岸和田城の庭（大阪府岸和田市）を作庭している。これらの「俯瞰する視点」は、作庭時に意図されたものであり、庭園を俯瞰する装置だった。しかし、現代においては既存の俯瞰する視点よりもはるかに高度の高層建築から日本庭園を俯瞰できるようになった。当然のことだが高層建築で人々は暮らしたり仕事をしたりするのであって、庭園を観賞する目的から高層建築のなかで過ごすのではない。さらに高層建築から俯瞰する視点は、塀に囲まれている庭園を自由に見ることのできる「パブリック」な存在に変えたといえる。だが、東京の日本庭園は公園や緑地のように都市計画に意図的に組み込まれたパブリックなものではない。本来プライベートなものであるはずの日本庭園が、高層建築から眺められ、人々に共有されることによって、結果的にパブリックなものになったといえるのではないか。プライベートが重なり合ってパブリックが形成されたのは、高層建築に囲まれた東京の日本庭園の特徴だと考える。